

未来の技術を提案

JCI中部支部 学生が発表

4校が連携



石川委員長

調査研究事業委員会の石川裕夏委員長はあいさつで「北陸地方のコンクリート構造物は全国でも最も劣化が進行しており、最も過酷な環境下にある。そこで、早い時期から診断士会が設立され、3県の診断士会の会員はトータルで300名を超えている。連携・交流を通じて活動を続けてきた」と述べた。また、今回のフォーラムは昨年の金沢、福井での開催に続くもので「3県の診断士会の協働による早期劣化の構造物の診断と対策のための人材育成事業」とし、北陸SIPをはじめとする大学との連携を深めてきたと説明した。

報告会では「私たちの

日本コンクリート工学会（JCI）中部支部は15日、富山市内のタワーズスカイホールで「これからの維持管理を支える技術と人材を考えるフォーラムIN富山」を開催した。北陸3県のコンクリート診断士が集まり、人材育成や維持管理技術の動向について報告したほか、北陸地方の大学生らが考えたコンクリートの未来について報告した。



将来の技術・人材育成を展望

が考えるコンクリート構造物の未来のすがた」と題する学生セッションが設けられ、3県にある大学、高等専門学校のほか、新潟県の大学、高専の学生らが「未来の点検技術」「未来の構造物」「未来の維持管理システム」についてそれぞれ報告した。未来の構造物ではビニール袋やベットのボトル、空き缶などの廃棄物を再利用したシートを、連続繊維補強コンクリートの材料にする「RRC Bridge」やコンクリートに特殊な光源を当てるだけで劣化箇所や要因、進行度が分かる「Visible Concrete」を提案した。また、超音波やX線を用いた点検技術なども考案。いずれの技術も実現可能になるまでは10年以上かかるとしたが、学生た

ちはこうした斬新な発想に対する称賛を浴びた。また、これまでに同フォーラムで報告されてきた事例を改めて紹介するとともに、富山県の自治体や大学の取り組みを報告した。それをもとにして「これ

からの維持管理を支える技術と人材に何が必要か」の題でパネルディスカッションを開いた。富山市の植野芳彦氏は「まず考えることができる人材が必要だ。自分がやるという気持ちで取り組むのが大事

で、それが人材育成の第一歩になる」と述べた。石川県コンクリート診断士会の古川博人会長は「維持管理に携わる人を増やさない構造物の診断は難しくなる。子供たちがコンクリートを作るイベント

を行っている。具体的には、学校や屋外で実際にモルタル補修材を使って、コンクリートは硬化の過程で熱くなることなど、実際に触って、知ってもらい、まずは楽しさを知ってもらうことが大事」とした。